
人形症候群

十夜 萌永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形症候群

【Nコード】

N0724M

【作者名】

十夜 萌永

【あらすじ】

2***年 地球

今世界の5割の子供が人形症候群である。

プロローグ

2***年 地球

今世界の5割の子供が人形症候群である。

暖炉の前に一人の少女。

少女？

ポキッピキッ

間接がつなぎ目のような後がある。

動きが不自然だ。人体で曲がるはずのないところが曲がってる。

まるで人形。

人形症候群。

今世界に流行っている病気だ。

皮膚が硬直し、人形のようにになってしまう。

最後には微笑みを浮かべて心臓が止まる。

そして、人を襲う。

今から話すのはセツナの話。

恵比寿 雪那。17歳。

エビスユキナ。

彼女を中心に世界はまわる。回る。廻る。

では、本を開きましょう。

プロローグ（後書き）

シリーズです

がんばりますっ

？

人形症候群 ニンギョウシンドローム 保朝 弓垂

2***年 地球

今世界の5割の子供が人形症候群である。

暖炉の前に一人の少女。

少女？

ポキッピキッ

間接がつなぎ目のような後がある。

動きが不自然だ。人体で曲がるはずのないところが曲がってる。

まるで人形。

人形症候群。

今世界に流行っている病気だ。

皮膚が硬直し、人形のようになってしまう。

最後には微笑みを浮かべて心臓が止まる。

そして、人を襲う。

今から話すのはセツナの話。

恵比寿 雪那。17歳。

エビスユキナ。

彼女を中心に世界はまわる。回る。廻る。

では、本を開きましょう。

暗い世の中だ。

巡回中だが、新聞を開いて私は思う。

「どうした。ユキナ眉間にしわがよってるぞ。」
よりたくもなるわ。ほっとけ。

でも…好きな人に言われたらおしまいだ。

私は恵比寿雪那。17歳。

ユキナじゃなくてセツナ。

こいつはまだ間違えてる。

こいつは目黒春太。

ハルタ、シュンタどちらとも読める。

本名はハルタ。

今は。

あの日以来私達は名を変えた。

ユキナからセツナに。

ハルタからシュンタに。

「またなってる。」
まだいうか。

「ユキナは笑ったほうが可愛いよ」

… 自分の顔が赤くなるのがわかる。
マジ反則…。

「あれ、ユキナ風邪？ 顔が赤いよ？」

KY。しかも重度の。

それじゃなきゃもっとモテるのに。

いや、私困るじゃん。

てか、何焦ってんの私。

「ユキナ？」

「あつ、ごめん。」

呼ばれたのに気がつかなかった。

私は新聞を閉じて、鞆につっこんだ。

「人形症候群の記事？」

人形症候群 にんぎょうシンドローム今流行っている、病気だ。
治療薬は開発されてない。

たぶんこれから出来ない。

あれは進化している。

毎日。秒刻みに。強くなっていく。

アレはそういうものだ。

「ピーー、ドール発見至急逃げてください！ 繰り返します…」

警報装置がなった。

ドールが現れる。

人形症候群にかかった人の末、ドール。
理性をなくし人を襲う。

ドールを止める手段は一つ…

「コラ、その小学生と高校生早くにげなさい！」

「小学生…？」

私はその警官に歩み寄った。

「誰が小学生よっ！」

「そうにしか、見えないだろう！とにかく逃げなさい！」

噛み付くように言った私に圧倒されたのか、たじろぐ警官。

「バカ。こいつ、高校生！」

そう言って警官にチョップしたシュンタ。

「それに、俺は中学生！」

どうも、弁解ありがとう…。
ちよつと複雑。

「分かったから、早く逃げなさい！もうすぐ、ドールクラッシャー人形壊がくるから！」
よろける警官。

まだ、チョップきいてる…コイツ。

もお行っちゃお…。

「待ちなさい！ドールにやられるぞ！」

「あー、言わなきゃ分かんない？君？」

シュンタが言う。

そして、警官の顔の前に腕章をつきつける。

「まっ、まさか！」

ベタな驚きかたね。

「DK ドールクラッシュャーですから大丈夫です。」

そう、ドールを止めるただ一つの手段。

世界に百人もいないといわれてる。

私とシュンタは最年少ペア。

腰を抜かす警官。

黒い笑顔でいうな。

私言われたことなくってよかった…。

ビシャッ。

警官の頬から血がでる。

「ウツ、ウワアア！」

ドールが来た。

「パアアア！」

シュンタの防御システムが発動した。

発動するのは、ドールが半径五メートルにいるとき。

私は周りを見渡す。

血に染まった少女のドールが迫ってきた。

「… シュンタ、援護お願い。」

「分かってる。」

もうしゃべれない警官を置いてシュンタが言う。
私は飛ぶ。

「ガキイイン！」

鈍い金属音が辺りに響く。

ドールの体は硬い。

心臓以外は。

だから、心臓をめがけて…

「ガッ、ゆキ那ア…」

「お前…、悠太のしもべか!？」

悠太、ハルタいや、もうユウタだ。
私達がDKになった原因。

そして、ドールの中心。

「ガッ、ブッ、久しぶり。」

急に声が滑らかになった。

「ユキナもハルタもDKになったの？」

「もう、ユキナでもハルタでもないわ。

私達はセツナとシュンタよ！」

貴方のせいで

「私達？随分仲良くなったんだね？」

僕抜きで…」

「お前はっ、ハルタではないっ！」

グシャ。

何回やっても好きになれないこの感触。
殺ったか？

「セツナ！」

シュンタがこの名前で呼ぶ時は本当にピンチ。
でもドールは私の前。

急に、

後ろから服をひっぱられた。

べちゃ。

私は血にすべって転んだ。

後ろを見たら警官が私の足をつかんでる。

「ちょっと！こいつを倒さないといけないのよ！」

警官は頬をあげ言った。

「あの人形は私の娘なんだっ！」

「だから？」

私は即座に言った。

警官にとっては大切な娘だけど、他の人にとってはドールでしかない。

人形壊　D Kの私の指名はドールの始末。

私は人形の攻撃を避けず、向かって来るドールに剣を刺した。
心臓を今度は確実に刺した。

父親の目の前で。

「あつ…！」

倒れた人形を見つめる警官。

「友梨香ア！」

人形の名前は友梨香：ユリカだった。

いや元の名前か。

あの人の名前と一緒にだ。ユウタの差し金か。

胸くそ悪い。

「…お巡りさん。特別条例人形症候群法第一法によって人形症候群にかかった患者は近くの症候群センターに渡さなくてはいいけませんよね？」

シュンタが言った。

もう完璧に抜け殻となったドールを抱えて泣きながら、警官は叫ぶ。

「ドールになったって友梨香は私の娘だ！お前らは人殺しだ！死んじまえ！友梨香を返せえ！」

よくこのようなケースは報告されてた。

まさか私達に回ってくるとは思わなかったけど。

症候群センターに連れて行っても処分されるパターンが多い。

ごくまれに例外　私達のように、シンドロームが効きにくい子供もいる。

どっちが良いのか分からないけど。

「あなた、舐めてんの？あなたの娘が撒き散らしたシンドロームのせいで同じ思いをした人がまた生まれたの！またドールが生まれた
！」

私は叫んだ。

もう我慢ならない。

自分のことだけを考えるなんて。

人ってこんなものなの？

私は対ドール用の剣に手をかけた。

「ユキナそこまで。」

優しい口調だけど、真剣な瞳でシュンタは私に言った。

「……っ！」

シュンタは私の腕をつかんでる。

「分かったわよ……。」

私は剣から手離れた。

あの瞳は苦手だ。
まっすぐ過ぎて。

「お巡りさん、娘さんが亡くなったことについてはお悔やみ申し上げます。」

警官は驚いたように顔をあげた。

「だけど、俺らが葬ったことについては謝りません。だって、それが使命だから。」「それでもっ!」

警官は叫ぶ。

シュンタは警官を遮って言う。

「こいつはあなたより辛いんだ。」

敬語を止めた。

「止めて、シュンタ。」

私はシュンタを睨んだ。

「……。」

沈黙。

「もう行こう。シュンタ。いいよ。」

私は肩の力を抜いて言った。

「サヨナラお巡りさん。」

私達は魂が抜けた警官を置いて歩き出した。

？（後書き）

1話ですー
疲れた…

？
(前書き)

続き

セツナがユウタに奪われたモノ
もう戻らない
振り向かない

？

「なあ、ユキナ…。」

「軽々しく過去を話さないで。」

シユンタの瞳が見開かれる。

「“ユキナ” だった頃の記憶は捨てたい。」

瞳が揺らぐ。

私は続ける。

「私は“セツナ” なの。 じゃないと、ドールでも人を斬れない。 言っただじゃない。」

視線がそれた。

シユンタは口を開いた。

「俺の中ではいつまでも“ユキナ” だ。 いくら変わったって、ユキナなんだ。」

悲しそうな顔。

瞳が涙で揺れている。

「-っ」

何か言おうとしたその時、間の抜けた声がした。

「コラー！ ハルタにユキナー！ 帰ったならサッサと報告しろっ！ …」

あれ、なんかタイミング間違えたか？ ワシ？」

…クソジジイ。

このおっさんは総家笑与一エタ。 ふざけた名前だ。 笑顔を与えるなんて。

多分60は越えた爺さん。

だけど見た目は40ぐらいのおっさん。

人形壊、ドールクラッシャー DKのリーダーでもある。

そしてユリカの父だ。

よくこんなおっさんから産まれたなって思う。

「おっさん、私の名前はセツナ。 なんべん言えば覚えんのよ？」

おっさんは眉をあげた。

「いつもならユキナでも怒らんのに、何カリカリしてんだ。それに
おっさんと呼ぶな。お美しく、気高くて格好いいエタ様と呼べ。」

「…分かりました。自称お美しく、気高くて格好いいエタ様？今す
ぐ死にたいらしいですね？」

私は剣を抜いた。自称お美しく、気高くて格好いいエタ様の首筋に
当てた。

「嘘嘘嘘嘘！やーめーれっ！いいよおっさんで。てゅーかワシよ
りハルタだろ？原因！」

盗み聞きか。おっさん。

「ユリカに挨拶しなくてよいのか？」

「彼女は人形よ。もう真正正銘の。人形に挨拶するの？」

私は自身にむけて皮肉を言っただつもりだった。

「今なら研究員もいないのになあ。そうかそうか。」

にやにやしておっさんは言う。

「うー…。」

「ユキナ、行くのか？」

シュンタ…。さっきまでしょんぼりしてたくせにつ。

「分かったわよっ！行くわよっ！てゆうか私はセツナだからっ！」

私は当たり前散らして、ユリカがいる部屋に向かって歩き始めた。

ユリカがいる部屋は本部の一番奥。

特別な人しか入れない部屋にいる。

コンコン。

ドアをノックする。……返事はないけど。

「ユリカー？居るなら返事しろー？入るぞ？」

おっさんはそれでも話しかける。

お医者さんが“根気よく話しかけた方が良い”とかなんとか言った
から。

ユリカの部屋はドアを入つてすぐ階段だ。

長い階段を登ると、天井に行き着く。天井を一定のリズムで叩くと天井が開く。最先端技術らしい。

天井の上。

一面が硝子の部屋だ。

他は白い壁に床。高い天井。

そこにユリカはいる。

23歳。

ユリカと、呼び捨てにしているがユリカは23歳だ。だけど見た目は少女だ。

人形のように整った顔。白く滑らかな肌。長い黒髪。

当たり前だ。

ユリカは中に人形を宿してる。

？（後書き）

疲れた…

次は過去編ですた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724m/>

人形症候群

2011年1月25日02時33分発行